茨　城　大　学　学　報

第295号
平成23年2月～平成23年3月

水戸キャンパス（図書館前）の様子

INDEX

◆　池田幸雄学長によるおもしろ天文学
◆　茨城高専、福島高専との連携協定の調印について
◆　学術講演会を開催
◆　平成 22 年度茨城大学学位記授与式

茨城大学総務部総務課広報係
TEL 029-228-8008
FAX 029-228-8019

◆　池田幸雄学長によるおもしろ天文学

２月２０日、「大洗わくわく科学館」（独立行政法人日本原子力研究開発機構）において同館主催のイベント、茨城大学池田幸雄学長による「いろいろ隕石とわくわく惑星のお話」が開催されました。

当日は、天文学に興味をもつ子どもから大人まで約８０名が参加し、池田学長のユーモアいっぱいの話術にときおり笑い声が起こる中、予定を３０分も超える長時間にも関わらず参加者は熱心に聞き入っていました。

「あなたは何になりたいの？」との池田学長の問いに、「科学者」や「宇宙飛行士」などと元気に答える子どもたち対し、「科学者になる素質は『なぜだ』と思うことから始まる。『なぜ』と思ったら、あとは一生懸命その答えを探すことが大切」と話しました。また、２０倍程度の望遠鏡しかなかった時代にいろいろな惑星を調べたガリレオを例にあげ、「ガリレオは今のような望遠鏡のない時代でも、人並み以上のやる気をもって研究をした。人間はやる気が大事」とも語りました。

講義の途中では、実際に火星の隕石を見たり触ったりすることもでき、子どもたちは「その辺にある石ころみたい」と、遠い惑星と自分たちの地球の共通点に驚いていました。

ユーモアあふれる講演に会場はときおり笑い声に包まれた

実物の火星の隕石を手に説明する池田学長

講演終了後、熱心な子どもたちの質問に答える池田学長

◆　茨城高専、福島高専との連携協定の調印について

２月２２日、本学は、茨城工業高等専門学校、福島工業高等専門学校と包括的な連携協定及び産学官連携の推進に向けて３校の各担当機関で産学連携に関する協定を結びました。

本学と両高専は、これまでに学生の単位互換について協定を締結し、産学連携の分野においては、「研究室紹介・シーズ集」への寄稿や技術交流会、近隣企業との技術相談や共同研究への参加などのほか、教職員の交流や情報交換等種々の交流を行ってきました。

今回は、これまでの関係をより強化し、産学連携活動がより一層推進するように、３機関で連携を結ぶこととなりました。その中で、地元企業への研究者の相互紹介や３校の共同研究などを進め、連携により技術力のある企業と研究者を結びつけやすくなるという効果を期待しています。

今後は、３機関がそれぞれ重点項目や地場産業の得意分野が異なるという特徴を活かし、教育や研究、産学官連携などで協力体制をより一層強化していきます。

（左から奈良福島高専校長、池田茨城大学長、角田茨城高専校長）

◆　学術講演会を開催

池田学長はじめ聴衆に向かって講演する相澤議員

２月２８日に水戸キャンパスにおいて学術講演会を開催しました。

本年度の講演会は、総合科学技術会議における第４期科学技術基本計画の策定に向けた検討に注目し、グリーン・イノベーション、ライフ・イノベーションの２大イノベーションをはじめとする我が国における、新しい科学技術・学術研究の方向性について、教職員の理解を深めることを目的として開催することを計画し、内閣府総合科学技術会議議員の相澤益男先生を講師にお招きし、「我が国の科学技術政策と大学の役割」をテーマに、茨城県からの後援を得て開催しました。

当日は、日立キャンパス、阿見キャンパスにもバーチャル・キャンパス・システムを利用して講演会の様子を同時配信したことにより、多くの教職員・学生の参加を得ることができ、参加者数は２２５名にのぼり、大変有意義な講演内容であったため、講演会終了後は活発な質疑応答が行われました。

この講演会により、今後の本学の学術研究の推進に向けて、全学的な認識を高めることとした当初の目的を十分に達成できたものと考えています。

池田学長と懇談する相澤議員

◆　平成２２年度茨城大学学位記伝達式

平成２２年度学位記伝達式は、３月２３日（水）午前１０時から事務局第３会議室において、学長、役員等の参列のもとに挙行されました。

今年度は、東日本大震災の深刻な影響により、被災された多くの方々の辛い現状を深く憂慮し、また、今後の災害発生の可能性も考慮し、式典を執り行うことについて慎重に検討を重ねた結果、平成２２年度卒業式は取りやめ、その上で、学生代表のみの出席の下に簡素化した形で学位記伝達式を挙行しました。

式は、池田学長から学部、大学院及び専攻科の卒業生、修了生の学部等の総代に学位記、修了証書が授与され、学長告辞、卒業生、修了生総代の答辞で閉式となりました。
なお、今回巣立った卒業生は、２，１１０名でした。

平成２２年度学位記伝達式　告辞

茨城大学長　池　田　幸　雄

最近、東北地方の太平洋沖で大地震が発生し、多くの尊い人命が奪われました。ここに、犠牲者のご冥福をお祈りすると共に、心から哀悼の意を表します。また、被害を受けられました多くの方々にお見舞いを申し上げます。

さて、本日、茨城大学をご卒業される「２１１０名」の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。また、学生諸君を励ましつつ、ご支援をしてくださいました両親をはじめ、ご家族ご親類の皆様にも、茨城大学を代表して、謹んで心よりお祝いを申し上げます。

まず、先日の大地震について、お話をしたいと思います。今月の１１日に発生した「東北地方太平洋沖地震」は、その直後の大津波と共に、未曽有の災害をもたらしました。地震の規模はマグニチュード９．０で、その被害は東北地方から関東地方にまで及びました。今回の地震は世界有数の規模であり、日本では明治以降最大でした。１９２３年（大正１２年）の「関東大地震」でさえ、マグニチュード７．９であったことは、今回の地震規模がいかに大きかったかを物語っています。

今回の地震による直接の被害はかなり甚大でございましたが、地震直後に発生した津波は、はるかに深刻でした。この津波は高さ１０ｍを超えた規模になって、東北地方や関東地方の太平洋沿岸を襲いました。この津波は想像を絶する破壊力で多くの市町村を飲み込み、二万人以上もの犠牲者・不明者を出す結果になってしまいました。

日本は、たびたび、津波の被害を経験して参りました。１８９６年の「明治三陸津波」や１９３３年の「昭和三陸津波」などが有名で、津波の恐ろしさは充分に知られていました。このため、三陸地方の沿岸には、津波から市町村を守るべく立派な堤防が築かれていましたが、今回の「平成大津波」には、ほとんど役に立ちませんでした。今までの堤防はマグニチュード７から８程度の地震を想定していましたが、今回の大地震はその数十倍から数百倍のエネルギーを示しており、とても従来の堤防が耐えられるような状態ではありませんでした。

地質学的には、かなり古い時代の津波が、東北地方の太平洋沿岸を襲った証拠を示しています。東北大学の箕浦先生の論文（２００１）によると、仙台平野には、津波堆積物からなる３つの地層があり、一番下の地層は約３０００年前で、中間の地層は約２０００年前であると考えられています。一番上の地層は約１０００年前で、この津波については、「日本三代実録」と云う古典に記載されています。この古典によると、西暦８６９年の平安時代・貞観年間に大津波があり、１０００人以上の犠牲者が出たと記されています。当時の日本の人口は３００万人程度ですので、現在の人口に比例して考えると約４万人の犠牲者に相当します。この「貞観大津波」は仙台平野を広範に覆ったものと考えられており、東北地方のみならず、さらに広く房総半島まで及んでいまして、今回の「平成大津波」に匹敵する規模を示しています。この「貞観大津波」を引き起こした地震の規模はマグニチュード８．４程度と予想されていますが、それ以上の可能性もあります。

このように、日本人は縄文時代より常に津波と闘って参りました。これらの資料を基に、今回の「平成大津波」は１０００年に１度の大津波であると言われています。今後、我々はこの「平成大津波」や「貞観大津波」を念頭において津波対策を考えなければなりません。日本は地震国や津波国であると同時に火山国や台風国でもあります。したがって、我々日本人は、地震、津波、火山噴火、台風等の自然災害に対して常に対峙しなければならない運命にあります。我々日本人はこれらの自然災害に勇気を持って立ち向かわなければなりません。この際、全ての日本国民が共に一致協力して、これらの災害を克服する覚悟が不可欠です。

今回の災害は多くの人々に不幸をもたらしましたが、一方で良い点も見受けられました。諸外国では、このような災害に遭遇すると、一般民衆が暴徒化し、商店等を襲う事態になる事がしばしばです。しかし、日本では、今回そのような暴徒化が全く見られないばかり

か、逆に、多くの日本人はすべからく順番を守り、整然と行列に従い、我慢に我慢を重ねて耐え忍んでおります。また、多くの日本国民が支援・協力を進んで申し出でおり、積極的に行動する姿が多く見られます。日本人の伝統的な美徳である「勤勉と我慢と思いやり」の精神は、現在でも健全であり、奇しくも、この大災害を通じて明瞭になりました。

大災害にも関わらず、日本人の「整然とした行列」を目の当たりにした米国の記者が、日本人の「我慢の精神」に驚きと称賛を持ってアメリカの新聞に語っています。「ガマン」と云う日本語は「ツナミ」と同様に英語の言葉になることでしょう。

今回の大震災の以前では、日本社会の暗さが大いに目立ちましたが、「平成大津波」は日本人の健全な精神を呼び戻してくれたように思います。日本人の「勤勉と我慢と思いやり」の精神があれば、日本の復興は、それほど難しくはありません。「禍（わざわい）を転じて福と為す」のことわざのように、「平成大津波」を契機として、明るくて活気のある新しい日本社会を構築しようではありませんか。これこそが多くの犠牲者に報いる唯一の道ではないでしょうか。この新しい日本社会の構築には、若者の情熱が必要不可欠であり、あなた方の双肩に懸っています。是非とも、諸君に頑張って頂きたいと願っております。

卒業生諸君は、社会に出て新たな人生を始める人や、大学に残って勉学を続ける人など、様々な進路に向かおうとしています。あなた方は、今までに茨城大学で培ってきた実力を糧として、それぞれの分野で頑張って頂きたいと願っています。しかしながら、あなた方の最大の使命は、「互いに協力し助け合って、明るい活気のある日本社会を構築する事」である旨を肝に銘じて頂きたい。これを持って、私からあなた方に対する「餞（はなむけ）の言葉」といたします。

最後になりましたが、改めて皆さんのご卒業を祝い、これからの皆さんのご活躍とご健康を心から祈って、学長告辞の結びといたします。本日はご卒業、本当におめでとうございました。